

再生願って ブロンズ像

米彫刻家、仙台のNPOへ贈る

ビ映像などに大きなショックを受けた。作品を通じ被災地にエールを送ろうと帰国後、半年かけてブロンズ像を完成させた。

贈り先を探していた2011年冬、リバサイド市と仙台市の姉妹都市関係を知り、両市の交流団体に寄贈を申し出た。話し合いを進め、仙台市側のメンバーと親交があった敬老奉仕会が受け取る事になった。

「まもる」「仙台」「復興」と名付けた3作品は、子どもを抱き締め津波から逃げる母親や、苦難から力強く立ち上がるうとする姿を表現した。

米国の彫刻家メイディ・モーハウスさん(62)が、東日本大震災からの復興への願いを込めて作ったブロンズ像3体を仙台市のNPO法人「仙台敬老奉仕会」(吉永馨会長)に寄贈した。同市と姉妹都市関係にあるリバサイド市が橋渡し役となり、実現した。

モーハウスさんは、観光のため滞在していた東京で震災を体験。帰宅困難者らが支え合う姿に感動する一方、津波が押し寄せるテレ

今月8日に青葉区の仙台国際センターであった贈呈式で、モーハウスさんは「作品を通じ、被災地を思っている人が日本の外にもたくさんいることを知ってほしい」と話した。

展示先は青葉区中山台2丁目のギャラリー「緑の館」。連絡先は「緑の館」090(5185)3129。



敬老奉仕会のメンバーにブロンズ像を手渡すモーハウスさん(右)